



2019年6月16日 歌舞伎鑑賞教室感想

—五感で楽しむ歌舞伎の世界—

韓昇熹（韓国）

東京外国語大学大学院 総合国際学研究所 世界言語社会専攻
博士後期課程2年

今年で日本に来て6年目となる。両親や友達が東京に来るたびに様々な観光名所を回って来た私だが、日本の伝統文化である歌舞伎を観に行ったことはなかった。もちろん、親や韓国から遊びに来た友達の多くが日本語の聞き取れないこともあっただろう。しかし、歴史学を専門とするものとしての使命感の下に日本の歴史について全く知らない親や友達を無理やりにあちこち連れまわしたこともある私だった。

確かに歌舞伎が能と共に日本を代表する伝統文化の一つであることは知っていた。日本研究を目指すものとして一度は見てみたいと思ってはいたが、様々な理由付けで自ら時間を割いて歌舞伎を観に行かなかったことが実情である。しかし、今回、坂口国際育英財団のイベントの一環で歌舞伎の公演を観られたのは幸運であったと思う。なぜかという、伝統文化を必死に守ろうとする若者たちの情熱に触れることができたからだ。日本だけではなく、韓国やその他の国でも伝統文化を楽しむ若者たちはそれほど多くはないと思う。いや、かなり少ないだろう。まず、私自身がそうである。恥ずかしながら、韓国の伝統的な芸能であるパンスリやタルチュムに関して真摯に感動した記憶はない。ただ、子どもの時に授業の一環として見たことがあるくらいである。

今回の歌舞伎公演でも公演を観に来た若者はあまり多くないように見えた。それにもかかわらず、若者になじみのない歌舞伎という芸能に興味を持たせるために必死になって解説を行う若者——実際、歌舞伎俳優としても活躍した——の気合に圧倒されてしまった。歌舞伎についての知識が全くないと前提した上、一つ一つ丁寧に歌舞伎の仕組みについて説明する彼の姿を見て、言葉でうまく表現できないほど歌舞伎に対する情熱がはっきりと感じられた。

普通の若者なら、選択しない道、伝統文化を守り続けようとする堅い姿勢、それはどこから出るものであろうと、「歌舞伎のみかた」を観ている間に考え込んだ。現代若者の感性に合わせて演じた「歌舞伎のみかた」が外国人でも気楽に聞けるほど分かりやすい内容だった反面、本編で使われている日本語は理解しがたいものが多かった。音声解説がない限り、どの



ような物語なのかすらさっぱり分からないまま、劇場を去って行っただろう。

だが、歌舞伎の「舞」は舞踊の「舞」である。言葉だけが表現手段ではないのだ。幕のヒロインである**お舟**の人形のようにふるまう舞踊は本編のなかで一番見どころだった。**お舟**は恋してはならない人に一目惚れした挙句、愛する**義峰**のために犠牲になる道を選んでしまうというありふれた物語だったが、**お舟**を演じた俳優の身動き一つ一つからとてつもない切なさがじわじわと伝わって来た。そうだ。言葉ではなく身体で感情を表そうとしたからこそ、言葉の壁を超えて普遍的に伝わることもあるものなんだ。改めて芸術だからこそ響かせることができる感情の領域があることに気づかされた。

本編を観ながら興味深く思ったことは表と裏の主人公がそれぞれ存在するという点だった。「歌舞伎のみかた」で主人公であると紹介された男は、演目の後半にちらっと登場するだけで、物語全般はヒロインである**お舟**がリードしていたように感じた。古典的な作品のなかで女性は男に振り回される受動的な存在として描かれることが多い。この作品でも一目惚れした男の命を救うために自分の命を犠牲にするという点では、一見受動的な存在とみなされるかもしれない。しかし、女性が躊躇せず積極的に相手に求愛する姿を見せているという点では、人目を気にせず自分の恋を勝ち取ろうとする積極性が見られる。歌舞伎が江戸時代の庶民の娯楽だったということを勘案すると、江戸時代とは、民間領域では私たちが思っていることより女性の自由、あるいは「解放」がなされていた時期だったかもしれない。

以上で、めったに見る機会がなかった歌舞伎公演を接する機会をくださった坂口国際育英財団の関係者様に感謝を申し上げることでこの一文を締めくくりたい。

以上